様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月30日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009　～　2011
課題番号：２１５００７０５
研究課題名（和文）
子どもの日常生活動作の育成プログラム開発に関する研究
研究課題名（英文）
Study on activities of daily living of the child development program for fostering
研究代表者
吉川　はる奈（ YOSHIKAWA HARUNA　）
埼玉大学・教育学部・准教授
研究者番号：７０２７２７３９

研究成果の概要（和文）：
子どもが日常の生活空間の中でどのように自分の動作を発達させていくのか、彼らが時間を過ごすことの多い、保育所、幼稚園の場、小学校の場での子どもの日常生活動作の発達を明らかにする。園生活での子どもの日常の遊び、学校生活での子どもの学習場面や遊び場面でのこれらの動作の発達が幼児、小学生の活動全体にどのように影響を与えるかについて明らかにし、生活動作の育成にむけた提案を行った。

研究成果の概要（英文）：
Development of the activities of daily living in many of how children and develops their behavior in space of everyday life, or they spend time, nursery, kindergarten and elementary school children to reveal. Made the proposal reveals or how development in learning situations for the children in the school life of the children in kindergarten play or play these behaviors will affect overall activities of early childhood, elementary school about and for the nurturing of life working.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般
キーワード：保育・子育て

１．研究開始当初の背景

子どもの身体動作の問題は、昨今、保育学、医学、教育学、心理学において、その重要性が指摘されている。

保育学においては、これまでも保育所指針や幼稚園教育要領において、子どもが自らの身体（からだ）をとおして体験し、遊びを通して心身を発達させることが指摘されている（2008、丸山）。子どもが日常生活内で行う動作「日常生活動作」は乳幼児期から基本的生活習慣の中で形成されていく。ところが、現代の子どもとその家族がみせる生活では、基本的生活習慣の中で育成されていく。ところが、現代の子どもとその家族がみせる生活では、基本的生活習慣の重要性は指摘されながらも、大人の都合が優先され、生活習慣の

獲得が思うようにすすまない例（2006、塚田）や十分な積み重ねができずに、食生活、衣生活、住生活を行う上で必要な動作に未熟さや不器用さが目立つ子どもが散見される。

医学では、小児科学や小児神経学において、乳幼児期の身体発達の重要性と身体の不器用さの問題、個人差の問題が指摘されている（2002、榊原）。

教育現場では、授業時の子どもの活動、取組みにみるからだのゆがみなど自身の生活を充実させていく原動力となる日常生活動作が十分に育成されていないことが問題としてあげられている。小中学校、高等学校家庭科における実習での生活動作の未熟さは顕著であり、授業内の育成や改善には十分つなげていけない現状である。生活動作の未熟さは家庭科の実習場面での問題だけでなく、他教科を含む学校生活全体にも影響を与えている。さらに、心理学においては、からだを使って遊ぶことや対人的葛藤の経験不足が現代の子どもの対人関係の発達の未熟さにつながる要因の１つとも指摘されている。

以上のように、多領域の分野において、子どもの身体動作の問題が指摘され、予防的な取り組みが協調されながらも直面する対応で精一杯というのが現状である。

２．研究の目的

上記の状況をふまえ、幼児と小学生が日常の生活空間の中でどのように自分の動作を発達させていくのか、彼らが時間を過ごすことの多い保育所、幼稚園の場、小学校の場での子どもの動作の発達を明らかにすることを目的にする。さらにそれらの日常生活内での動作の発達が幼児、小学生の活動にどのように影響を与えるかについて明らかにし、動作の育成にむけた提案を行うことをめざす。

３．研究の方法

幼児、小学生を対象に、保育の場面、お弁当の時間、授業内の場面、給食の時間、休み時間など、子どもの活動、生活動作をデータ収集した。観察法を用い記録した縦断的データ、デジタルカメラによるデータ、描画活動に関しては、自由場面での描画活動のほか、描画技法のデータ収集は、一斉に描画を行う時間を設け、データ収集した。

４．研究成果

以下に研究成果の一部を紹介する。

(1) 幼児の園生活内での動作の発達とその影響

①描画活動での手指の巧緻性

幼稚園に入園する３歳児は、初めての社会集団としての幼稚園で、大きく変化した環境の中、様々な生活動作や遊びを経験し、自分でできることも増加する。幼稚園に通う３歳児を対象として描画活動における手指の巧緻性に着目し、幼児の描画活動の発達について明らかにした。

「方向を調整する」：技法の出現率では、23項目のうち単縦線、単横線、単斜線、単曲線といった単線、すなわち１本で描かれた線が、1回目 19.3%、2回目 23.3%、3回目 27.5%、4回目 29.5%と増加し続けていた。このことから単線で描くことが多い時期であり、幼児は真っ直ぐな単線が描けるようになっている。また幼児が使う技法の数の変化では、10個以上の技法が、1回目 4%、2回目 14%、3回目 13%、4回目 40%と入園当初から秋にかけて増加していた。よって３歳児は様々な技法を使えるようになっていることがわかった。

「力を調整する」：線の濃淡を、淡い、濃淡混合、濃い、の 3 つに分類し調べたところ、淡い線は１回目の 12%のみで、濃淡混合の線は１回目では 12%、2回目 3%、3回目 17%、4回目 7%であり 1回目と 4回目を比べるとだんだんと安定した濃い線が描けるようになっている。これは手指の力の調整が発達し安定したものと考えられる。また３回目では大きく描こうとしたときなどに濃淡混合の線が多く出現しており、腕を大きく動かすときに力の調整が難しくなっていると思われる。

「なめらかに描く」：線の揺れに着目し、揺れがある、少し揺れがある、ほとんど揺れがない、の３つに分類し線の安定度を調べたところ、ほとんど揺れていないが 1回目 60%、2回目 66%、3回目 43%、4回目 74%と増加している。このことから繰り返し描くことで慣れ、揺れのないなめらかな線を描けるようになることがうかがわれた。線の揺れは描画技法の新たな獲得やその幅を広げていく際に、ほとんどの幼児が経験するものと考えられ、3 回目にそのような幼児が多かったことがわかる。なめらかに描くということは腕や手首を上手にコントロールすることが必要であり、その方向の調整や力の調整とも相互に関連すると思われる。

②描画技法での表現の発達

使用する色の数の変化では、7 色以上使用している幼児が１回目では32%であったのが4回目では 40%となっており、色彩感覚も豊かになっている。また多くの幼児が命名したりストーリーを口に出したりしながら描いており、描く題材がはっきりしていることが多い。幼児の描画に描かれる題材には幼児の

思いがこめられており、それを表現できた、認めてもらったという経験は、幼児の「描きたい」という思いを強くすることもうかがわれた。表現できる技法が発達することによって、表現できる内容が充実し、幼児が表現できる喜びを経験することにもつながる。

③砂遊びで使用する動作

幼児が園での日常で繰り返し行う遊びのうち、砂遊びでの使用動作について以下の通りとなった。

砂遊びで使用されたのは 51 の基本動作のうち 41 で、そのうち多く観察されたのは、「運ぶ、運び入れる」「もつ」がそれぞれ 34、「掴む」が 30、「掘る」が 28、「入れる」が 27、「並べる」と「固める」が 20 であった。ほかの遊びに比較して使用する基本動作数が全体的に多い結果となった。

④積み木遊びで使用する動作

遊具のなかで積み木遊びは多くの園で観察される活動だが、小型積み木と大型積み木のそれぞれで使用される基本動作を調査した。

小型積み木遊びでは、５１の基本動作のうち、観察されたのは 10 動作で少なかった。数多く観察されたのは、「支える」「運ぶ」「つかむ」「止める」「並べる」であった。

大型積み木では、51 の基本動作のうち、観察されたのは 15 動作で少なかった。「運ぶ」「持つ」「並べる」は 11、「押す」「起こす「おろす」は 10 であった。

⑤食事場面でみられる行動や会話

幼児は保育所や幼稚園に入園後、給食の時間あるいはお弁当の時間を通して、「食事時間に仲間と会話をする」こと「仲間と食べる」ことを経験する。子どもが園での給食時間、お弁当の時間でみせる仲間との会話や行動の特徴について、４歳児の給食の時間とお弁当の時間での比較を比較した。

保育園に在籍する４歳児、幼稚園に在籍する４歳児を対象に保育園、幼稚園いずれも食事グループでの子どもの会話と行動をＩＣレコーダ、フィールドノート、デジタルカメラを用いてとらえ分析した。給食の食事グループの会話では、「メニューに親しむ」内容が 46.7%をしめ、お弁当のグループでは、「食べ物以外」の内容を「ことばで楽しむ」ことが目立ち、46.2%をしめた。「マナー」や「好き嫌い」に関する内容は給食でのグループで一貫してみられた。「マナー」に関するエピソードでは、箸の使い方、等への指摘と提示動作があった。

(2)描画活動が幼児の発達に与える影響

幼児の描画表現の特徴を捉え、「様々な図形を描く」「『こだわり』を持って描く」「描画を通して他の幼児との交流を楽しむ」「園生活への慣れとともに表現が発達する」のタイプに分類した。

「遊びの多様性が描画を生み出す」幼児の描画には、様々な図形を並べて描いたり、独自のキャラクターを展開させたりと特徴が見られたが、それは描画活動独自で発達していくわけではなく、好んで行う遊びやそのやり方、好きなものなどとも密接に関係していた。幼稚園では自然と数多くの遊びを経験できるため、自由遊びでは好んで描画を行うことがなくても、様々な遊びを楽しみながら園での一斉活動や各家庭などで描画の経験を重ね、試行錯誤をすることで発達していくと予測される。

「 仲間関係の育ちが描画を生み出す」はじめは画用紙の隅の方に遠慮がちに描いていたが、園生活に慣れるとともに画用紙いっぱいに描くようになった幼児がいた。春に入園し初めての園生活を送る 3 歳児は、始めから楽しく遊べる幼児もいれば好きな遊びや居場所が見つけられずになかなか慣れることができない幼児もいる。まずは教師が基盤となって幼児との信頼関係を築き、仲間関係を広げていくことで、お互いに認め合い自己を十分に発揮できるようになり、本研究で見られた友達と一緒に描くことを楽しむ幼児のように描画を始め様々な活動における発達が促されると考えられる。

「生活の自立が描画を生み出す」園生活では、一人一人が自立して着替えや食事といった生活動作を行うようになる。7 月には園服のボタンの留め外しがスムーズにできるようになり、同時に描画においては独立円が多く描かれている。様々な生活動作ができるようになっていく過程での自信や支えが励みになり、幼児の生活の自立が促され、同時に手指の巧緻性も促進されることがうかがえた。

(3)小学生の生活内での動作の発達とその影響

以下に一部を紹介する

「図形の模写」3 年生の児童では、図形を描く活動では、三角形を正確にかけた児童は 60%、ひし形を正確にかけた児童は 33%であった。

「箸の持ち方」正しい持ち方をしている児童は 30%であり、中指を使わない持ち方をしている児童が多かった。

「鉛筆の持ち方」適切な持ち方をしている児童は 27%であり、適切でない持ち方の中には「親指が人指し指にのっている」児童が多かった。そのため鉛筆の角度が垂直になってい

る児童がめだった。また正しく箸をもてる児童のうち、鉛筆も適切に持つ児童は40%であった。

(4)動作の特徴と幼児、児童の活動への影響
　ドッチボールや鬼ごっこなどを好む児童は遊びの遂行を目的として活動していて、幅広く友人関係を築きルールや協調性を身につけていた。一方、少人数で遊ぶブランコ、雲梯などを好む児童は、情緒的なつながりの中で活動し、だれと遊ぶかを重視し、結果として友人関係も狭い傾向にあった。
　砂遊びでは砂、泥、見ず、花びらなど自然素材を中心にシャベルやバケツなどの道具を使いながら遊びが展開する。変形自在な素材を相手にする砂遊びにおいては、幼児のイメージは膨らみやすく、遊びのアプローチも様々なになり、動作が幅広く発達しやすいと考えられる。大型積み木や小型積み木は多くの幼児が使用する遊具だが、観察された基本動作は固定的で、数がふえなかった。
　自然素材を用いることによる繰り返し遊びは基本動作を多く用いる遊びであり、日常の生活空間の中で生活動作を高めていくことにつなげていくことが期待できる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）
① 神谷友里、吉川はる奈、小学生の遊び場面にみる対人関係の発達に関する研究、埼玉大学紀要教育学部、査読無61、2012、139－148
② 石川敦子、吉川はる奈、中学校「技術・家庭科」の乳幼児ふれあい体験学習における効果と課題、埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要、査読無11、2011、153－162
③ 神谷友里、吉川はる奈、幼児の役割遊びにおける役割取得の特徴に関する研究、埼玉大学紀要教育学部、査読無60、2011、19-28
④ 吉川はる奈、尾城千鶴、高校生の「家庭科」保育体験学習の意識変容、埼玉大学教育学部紀要教育学部、査読無 60(1)、2011、57-65
⑤ 尾城千鶴、吉川はる奈、高等学校「家庭科」における保育体験学習の教育的効果と課題、埼玉大学紀要教育学部、査読無59(2)、2010、59-67
⑥ 吉川はる奈、安藤宮子、現代小学生の生活動作と健康調査に関する研究、埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要、査読無、８、2009、139-147
⑦ 松丸英里佳、吉川はる奈、４歳児の園生活での仲間関係の発達に関する研究、埼玉大学紀要教育学部、査読無 58、2009、135-143

〔学会発表〕（計４件）
① 吉川はる奈、佐藤綾花、幼児の園生活の描画活動の発達に関する研究、日本家政学会第63回大会、2011年5月28日、和洋女子大学
② 吉川はる奈、小林綾子、4 歳児の食事グループでの会話の特徴に関する研究、日本家政学会第62回大会、2010年5月30日広島大学
③ 吉川はる奈、下平奈津美、男子大学生の子育て意識に関する研究、日本家政学会第61回大会、2009年8月31日武庫川女子大学
④ 吉川はる奈、体験的子育て理解教育の実践、日本保育学会第62回大会、2009年5月17日、千葉大学

〔図書〕（計１件）
① 吉川はる奈、保育の場での保護者理解をめざした援助の実際、幼児理解と保育援助、2010、107-116、建帛社

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：
〔その他〕
ホームページ等　なし
６．研究組織
(1)研究代表者
　吉川　はる奈（YOSHIKAWA HARUNA　）
　埼玉大学・教育学部・准教授
　研究者番号：２１５００７０５
(2)研究分担者
　なし（　　）
　研究者番号：
(3)連携研究者
　なし（　　）
　研究者番号：